Bulletin of Aichi Univ. of Education, 70（Art, Health and Physical Education, Home Economics, Technology and Creative Arts）, pp. 15 − 23, March, 2021

小学校音楽科における「思考を伴った試行錯誤」により子供の内的変容を導く「音楽づくり」(5)
―グループとクラスの2段階の活動で「組曲」を創り上げていく活動―

新山王 政和*　渡会 深麻**

* 音楽教育講座

** 安城市立錦町小学校

Elementary School Music-Making Activity Utilizing the “Trial and Error Method with Thinking”: Activities That Create a Musical Suite in Two Stages: 1. Small Groups, 2. a Class-size Group

Masakazu SHINZANO* and Mio WATARAI**

*Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Nishikimachi Primary School, Anjo 446-0035, Japan

1．研究の目的と結果の骨子

1．1　研究の背景

本報告は，研究の方向性の措定と研究授業の基盤の提案，及び実践結果の考察を筆者が担当し，研究授業の具体的な立案とその具現化及び一次分析を「令和元年度安城市教員派遣研究生（委嘱委員：筆者）として取り組んだ渡会深麻教諭が担当している。[1)]

本実践の特徴は，グループで創った音楽をクラスで「組曲」へ構成する2段階の活動を行うことで，自身の思いや意図を表現するだけでなく，他者の表現の工夫をサポートする経験を通して，子供の中で音や音楽に関する内的変容が引き起こされていた点である。

「即興演奏」とは，その場の思い付きや偶然のみに依拠するものではなく，それまでの経験や知識の蓄積の上に成り立つ「即時的な演奏活動」として捉えられることが多い。特に「アドリブ」は，自身の演奏表現に関する蓄積と音楽的ルールや曲想・曲の雰囲気との適合性あるいは逸脱・齟齬，さらに自身の演奏意図や表したいイメージとのバランスや調整について，演奏中，思考に基づく判断が活発に行われていると言う。しかし現実の小学校音楽科では，「音あそび」の延長に止まる音楽づくり（創作）の活動や，その場の雰囲気や「ノリ」だけで創られたもので作品の再現が不可能な音楽づくりの活動も多く見られる。この場合，小学校低学年から高学年へと積み上げていくことを難しくし，さらに中学校の「創作」との連続性や一貫性をもたせることも極めて困難であろう。よって筆者は「自らが設定した表したい思いや意図のイメージに向かって思考を伴う試行錯誤による創意工夫を重ねていくような音楽づくり」の試案づくりとその授業化に取り組んできた。[2)]

今回採り上げた研究実践は，初めにグループで「花火」の音楽づくりをした上で，クラスで「組曲『花火』」を構成するという2段階の活動によって，子供は自身の思いや意図を表現する方策を創意工夫するだけでなく，他者の思いや意図の表現を手助けする経験を積むこととなった。これにより子供は，音や音楽に関する多くの気付きを得ることができ，学習指導要領の〔共通事項〕で示されている「音楽を形づくっている要素」（「ア音楽を特徴付けている要素」及び「イ音楽の仕組み」，以降「音楽の要素」と略す）と曲想や雰囲気との関係性に関する学びを深めることが可能になった。さらに他者の表現の工夫をサポートすることで，自身の中で音や音楽に関する内的変容が誘発され，より計画的に思考を伴った試行錯誤による創意工夫を継続的に深めることにも繋がっていた。

1．2　筆者が希求する「音楽づくり」の活動

音楽科の授業では，活動の対象である音楽そのものを客観的に捉えることが難しい。しかし自らの音楽表

現を冷静に受けとめるメタ認知や，聴き取った曲を留める記憶が不足していれば，音や音楽を振り返りながら高めていく創意工夫の活動は成立しない。筆者は表現と鑑賞を一体化させる実践において，ICT機器が「音楽の鏡」としてモニタリングやリフレクションに活用できることを確認してきた。

また，文部科学省小学校学習指導要領（以下，学習指導要領と略）の「A表現・音楽づくり」に「音を音楽にしていく」(低学年),「音を音楽へと構成する」(中高学年）と記されていることから，まず表したい思いや意図をイメージとして固めてから，それに近づくように思考を伴った試行錯誤を積み重ねる音楽づくりや，イメージに向かって新たな表現に気付いたり知識を更新したりする音楽づくりの活動を模索している。

2. これまでの研究実践で明らかにされた課題

これまで3名の協力者を得て4つの研究実践を行っている。そこで得られた課題を次のように整理しておく。詳細は文末に記した拙著を参照されたい。

2. 1　知覚できても感受に結びつかない

自身が表したい思いや意図をイメージとして固めた後に，そのイメージに向かって音の並べ方（リズム）や音の繋ぎ方（旋律）を工夫しながら創り上げていく音楽づくりの活動では，音楽の要素に気付いて聴き取るスキル（知覚）や，よさを感じとってそのはたらきを考える力（感受）が活動の基盤になる。しかし実際には，音楽の要素の変化に気付いて知覚することはできても，その音楽の要素の変化がどのような曲想や雰囲気を醸し出しているのか考えたり，そのよさを感じたりする「曲想と音楽の構造などとの関わり（学習指導要領)」まで深めることが難しい。

2. 2 「音楽の仕組み」の活用に至らない

「音楽を形づくっている要素」の内の「イ音楽の仕組み」を活用する発想が現れにくい。その理由として，それ以前の低学年で行われてきた音あそびやあそび歌などの活動の中で，「反復，変化，呼びかけとこたえ，(音楽の縦と横との関係：高学年)」などの「音楽の仕組み」について，音や音楽を結び付けて体感させたり意識させたりする活動が希薄でレディネスが不足していたと考えられる。よって「音楽づくり」の活動に入る前に，表面的な音楽あそびの活動に終始することなく，曲に含まれる「音楽の仕組み」の意識化を促す活動を行っておくことが必要である。

2. 3　視点や思考が拡散して議論がかみ合わない

音楽づくりの活動の中で，自分がどの音楽の要素をどのように変化させているのか意識させることが大切である。本実践では，小型ホワイトボードや実践者の板書を用いて，ある子供の気付きや発言が他の子供の意識化を促すきっかけになり，「今，何について話し合っているのか」をクラスで共有し，共通理解へ繋げていた。また板書による視覚化により「思考の足跡」と「学びの履歴」を把握できるため，思考を伴った試行錯誤と創意工夫の継続や深まりに効果があった。

3. 筆者が措定する「音楽づくり」の基本構想

3. 1　モニタリングやリフレクションの重視

ICレコーダーを「音楽の鏡」として用いることで，活動のモニタリングやリフレクションを促進することである。これにより主に次の2点をめざしてきた。

①自分の考えや意見である“解”をもつ

音楽的に自己を客観視することができて，“自分なりの解”に向けた課題を見つけ出す力。

②よりよいものをめざして改良し続ける力をもつ

思考を伴った試行錯誤を繰り返して，よりよいものを求めて創意工夫を重ね，深めることのできる力。

③活動のプロセスを重視する

学習指導要領に「ア（イ）どのように音を音楽にしていくかについて～」(低学年),「ア（イ）音を音楽に構成することを通して～」(中高学年）とあるため，創り上げていく学習活動のプロセスを重視する。具体的には，試行錯誤の「思考の足跡」や，新しい視点の獲得や知識の更新などの「学びの履歴」を評価する。

3. 2　筆者の一連の研究で措定している活動モデル

研究実践の活動モデルは，「自己に対して批判的に向き合う批判的思考」「主体的･対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング)」「構造化し，再構築，更新される知識」「活動のプロセスを重視」を鑑みて，次の3段階に措定している。

①鑑賞と音楽づくりの活動を一体化する。この第1段階では，鑑賞によって音楽の構造と曲想の変化の関係を知覚し，そこから何を感じるのかを感受する。

②第2段階では，表したいことをイメージとして固めてから，それを表す音楽づくりの活動に取り組む。その際，次の2点に気を付けさせる。

・音楽的に自己を客観視し，自分なりの「解」やそれに向けた「方略」を見つけ出す。見つけ出した解や方略が適切であるのかICT機器を活用して繰り返し振り返る。(モニタリング)

・ICT機器を用いて作品を振り返ることで，よりよい音楽づくりに向けて思考を伴った試行錯誤を繰り返す。これを重ねることで自ら創意工夫を深めていく。

③第3段階では，創った作品をより客観的に評価するために他者とアドバイスを交換することで，新しい視点や自分がもっていない価値観に気付き，創意工

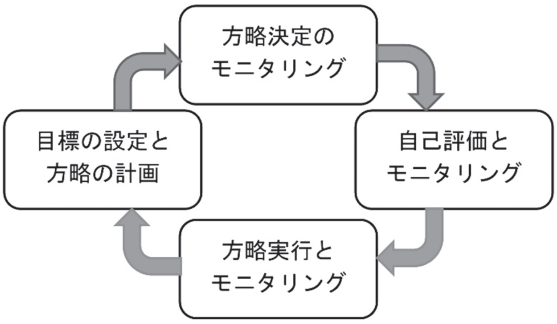
夫の着眼点を得る。(リフレクション)

4.　「音楽づくり」の活動３段階

4．1　参考にした「自己調整学習」のモデル

かつて文部省教科調査官が「活動あって学び無し」と指摘した音楽科授業を改善するために，B.J.ジマーマン「自己調整学習の理論」(北大路書房,2006) を基にして，基本的な活動段階を次のように措定した。

［自己調整学習のモデル図］
B.J.ジマーマン他（2008）より筆者作図

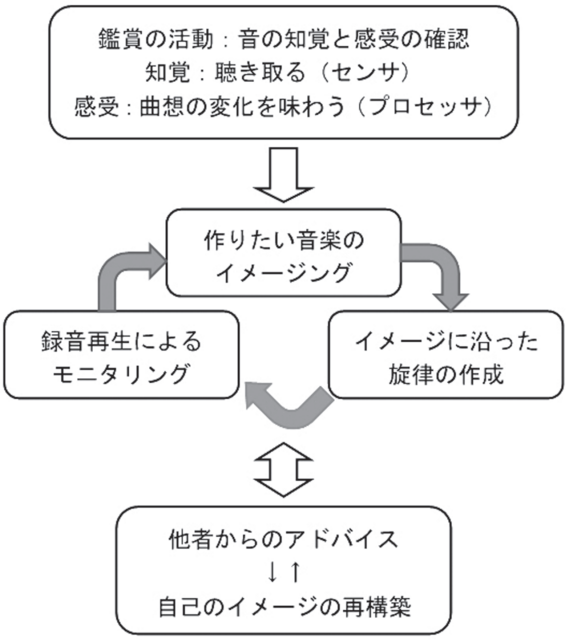


［ジマーマンの「自己調整学習」の図式化］

4．2　筆者が措定した「音楽づくり」の活動モデル

前節の「自己調整学習」に加えてM.テイト＆P.ハック「音楽教育の原理」(音楽之友社,1991) を参考にして，音楽づくりの活動3段階を措定した。

(1) 鑑賞で，音楽の構造と曲想の変化との関係を知覚し，醸し出される雰囲気を感受する段階。
(2) 表したい思いや意図を考えてから，それを表現する音楽づくりに取り組む段階。
(3) 創った旋律を，ICT機器を用いて他者と共有し，冷静な自己評価と創意工夫の着眼点を得る段階。



［筆者が措定した「活動の３段階」の図式化］

4．3　今回の実践者が作成した活動構想図

今回の研究実践を行った渡会教諭は，活動の構想を次のように整理している。(ページ下部の図参照)

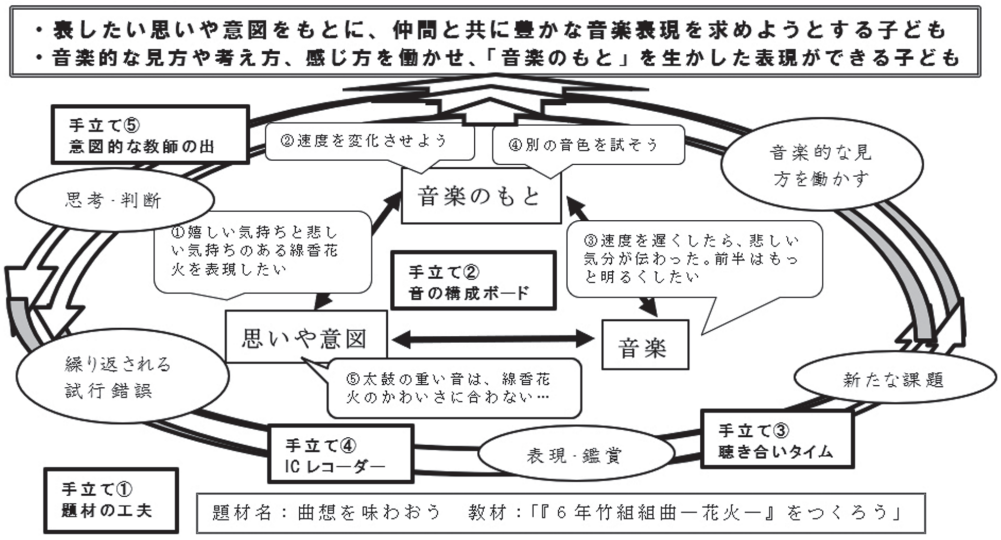
5．今回の研究実践の報告

実践者である渡会教諭が「令和元年度安城市教員派遣研究生として取り組んだ研究授業について，実践者が記した同報告書の中から筆者が抜粋要約する形で紹介したい。文中，筆者が注目するポイントへ下線を付しておく。

5．1　研究実践の概要

「第6学年音楽科授業構想」指導者：渡会深麻
(2019年7月～2020年2月実施)

①題材名：曲想を味わおう



②教材：「『6年竹組　組曲―花火―』をつくろう」
（筆者注）途中で他の活動を挟みながら，16時間完了の授業として構成されている。

5．2　育成する子どもの姿と仮説（下線筆者）

①表したい思いや意図をもとに，仲間と共に豊かな音楽表現を求めようとする子どもを育てる。
②音楽的な見方や考え方，感じ方を働かせ，音楽の要素を生かした表現ができる子供を育てる。
③互いの思いや意図，表現について考え合い，聴き合う場の設定をすれば，子供達は表したい思いや意図をもとに，仲間と共に豊かな音楽表現を求めようとするものと措定する。
④思考を伴った試行錯誤を繰り返す学習を行えば，音楽の要素と曲のつながりを意識し，音楽的な見方や考え方，感じ方を働かせ，音楽の要素を生かした表現ができるようになると措定する。

5．3　手立てのポイント

①これまでの実践との継続性や発展性のある教材を用いることで，技能差や苦手意識を軽減させるとともに，自分の思いやイメージを明確にできるようにする。
②一つの作品をクラスで完成させる「組曲」を題材の終着点とすることで，学び合いに向かう問題意識を高め，曲想を捉えて聴き合ったり，互いの思いや表現に寄り添ったりできるようにする。
③表したい思いや意図を仲間と共有するための小型ホワイトボードを活用し，自分達が構想した音楽がどのように構成されているのか，思いや意図とどう繋がっているのかを視覚的に捉えられるようにする。
④ペアグループ（2つのグループでペアを組む）やクラスでの「聴き合いタイム」で鑑賞し合う場を設け，互いの表現のよさや改善点などについて意見を交流させることによって，自身の表現を見つめ直し，自分達の表現のよさを再認識したり，新たな表現方法や価値観に気付かせたりする。
⑤ICレコーダーを活用して表したい思いや意図が音楽に反映できているのかを振り返ることで，思考を伴った試行錯誤を重ねられるようにする。
⑥「音楽を形づくっている要素」のはたらきや曲想との関係性を意識させるための意図的な教師の介在（問い返しや発問）を工夫するとともに，板書で視覚化することで子供の意識を「表したい思い・音楽の要素・音楽（表現）」の3つを結び付けた思考へと導く。
⑦子供の表現の根拠を明らかにしたり，表現の変化を価値付けたりすることで，音楽の要素と表したい思いや意図とを結び付けた活動を深めるように促す。

5．4　研究授業の構想

①第1時：「組曲」を知る
鑑賞教材「組曲：木星（ホルスト作曲）」
「組曲」という音楽のジャンルを知ることで，クラスで「組曲」をつくる活動に興味や関心をもたせる。
②第2～5時：音楽の要素を意識する
表現教材「星の世界」「雨のうた」，鑑賞教材「ハンガリー舞曲第5番」
音楽の要素（調，音色，速度，リズム，音の重なり，和音の響き）」の理解を深め，それらが生み出すよさやおもしろさを感じ取り，音楽の要素を根拠にして話し合ったり，表現活動をしたりする。
③第2～7時（②と並行して実施）：音楽づくり
教材「小型ホワイトボード」各グループに配置，「ICレコーダー」各グループに配置
3～4人で一つのグループを編成し，表現したい「花火」を考えたり，演奏方法を選択したりすることで豊かな音楽表現を求めようとする気持ちを高め，自分たちの創りたい音楽のイメージを固め，小型ホワイトボードを活用して表したい思いや意図を明確化する。
④第8～10時：音楽づくりを深める（試行錯誤）
教材：3色の付箋紙（文末の写真1と4を参照）
「表したい花火のイメージ」「音楽」「音楽の要素」の結びつきを可視化し，表現ができている部分を青色，満足できない部分を赤色，音楽の要素に関する気付きを黄色の付箋紙へ記入し，小型ホワイトボードへ貼る。また教師の意図的な介在によって自らの考えを価値付けたり，自分の表現の工夫を振り返ったりして，音楽の要素と曲想や雰囲気との関係性を意識する。
⑤第11～13時：「組曲」の特徴を知る
鑑賞教材「組曲：木星（ホルスト）」「組曲：アルルの女より（ビゼー）」「組曲：動物の謝肉祭（サン・サーンス）」
3つの組曲を鑑賞し，組曲の特徴を具体的に知ることで，どのような組曲にしたいのか，クラスの意図をもたせる。
⑥第14～16時：組曲の構成を考える
各グループで完成した小曲を互いに聴き合い，曲の特徴を考えることで音楽の要素と曲想の関わりを再認識させる。また組曲に並べ替える活動を通して，自分達の「作品」のよさに改めて気付いたり，他グループの音楽の良さを見出したりすることで，仲間と共に音楽表現を考えた達成感を見出せるようにする。

5．5　実践者による考察の概要

実践者の渡会教諭が教員派遣研修生報告書の中で記している分析及び考察の結果から，筆者がその概要を3つに整理して紹介しておきたい。
①小型ホワイトボードによる問題意識の共有や，ICレコーダーを用いたモニタリングが，子供の試行錯誤やリフレクションを促す効果があった。
②教師による意図的な介在が，音楽の要素と表現の関

係性をより強く意識させる効果があった。
③結果として，理由を付して意見を述べたり提案したりできるようになった。また，自分の意見や考えを明確に述べることができるようになった。

6. 筆者が注目したポイント

6. 1 「調」に関するイメージをクラスで共有

「花火」の創作活動に入る前に長調と短調のイメージを整理させてクラスで「調」のイメージを共有することにより，自分と異なる感じ方や他者の価値観を知り調に関する学びを深めている。以下に，各グループの小型ホワイトボードに記された言葉を紹介する。曲想を表現する言葉が豊かであることに注目したい。
①［長調：ワクワクしている感じ，色で表すと明るい色，うれしい感じ，お花畑みたい，楽しい感じ］／［短調：色で表すと黒，おばけやしきで流れている感じ，チクチクしている感じ，夜中に一人で歩いている感じ，さみしい感じ］
②［長調：楽しい感じ，明るいときに使われそうな感じ，曲のサビでつかわれる］／［短調：さみしい感じ，暗い，きらわれたとき，おばけやしきにいる感じ，もやもやした感じ］
③［長調：（実践校の）子供の歌，天気が快晴，楽しい感じ，ちょうちょが飛んでる，ようせいが飛んでいる］／［短調：うす暗い，きたいをうらぎる，明るくなると思ったら暗くなった，雨道を一人で歩く，ちょうちょうがなくなってしまった，ようせいしんだ］
④［長調：（実践校の）子供の歌みたいな明るい曲に使われそう，楽しいパーティーみたい，色で表すとオレンジとかの明るい色，天気・晴天］／［短調：色で表すとにごっている，サラリーマンの帰り，かなしい，ぜつぼう的な音，天気・くもり雨］
⑤［長調：さわやかな感じ，元気な感じ，黄色イメージ，はねる感じ，洋風，楽しい，陽］／［短調：食べ物でいう腹にたまる感じ，和な感じの曲に使われそう，暗くてつらい感じ，しょんぼりとした，むらさき色のイメージ］
⑥［長調：遊んでいる，楽しい感じ，元気，キラキラ，パステル，夏，晴れ，明るい，天使］／［短調：まほうがかけられるみたい，かなしい，冬，雨，くらい色（黒），あくま，じこく，死，毒］

6. 2 発音（音色）の探求とクラスでの共有

「花火」の創作活動に入る前に「体を使って出せる音」について考えることで「発音のアイデア（どのようにすれば，どのようなイメージの音を出せるか）」に気付かせて，それをクラスで共有している。これにより音や音色に関する学びを深め，音の出し方と音色の関係性をより強く意識する効果があった。結果としてグループで花火を工夫する活動やペアグループで聴き合う活動において，演奏方法と表現に関わる試行錯誤や工夫を促進させていた。各グループの小型ホワイトボードに記された発音のアイデアを紹介しておく。
・むねと手ドン，うたれる感じ
・口で音を出す，短くてはずむ感じ，パッ
・歯と歯で上下にかみ合わせる，カチカチかたい感じ
・くちびるを鳴らす，ブルルルル，おもしろい感じ
・手のひらの下をあわせてたたく，パコパコ，かわいい感じ

6. 3 表したい「組曲」のイメージをクラスで共有

グループで創った「花火」を単純に並べて「組曲」にするのではなく，どのような構成で組曲にするのか，何を表現したいのかをクラスで話し合い表したい組曲のイメージを共有してから，曲の配置を考える活動に入っている。その過程で「木星」「アルルの女より」「動物の謝肉祭」の鑑賞を取り入れ，組曲がもつ特徴や曲想について学びを深めている。実践者による板書から，子供の発言の概要を紹介する。

「組曲『花火』の構成を考えよう」
ストーリー性　音楽としてのまとまり
しっかり→ゆるやか→かろやか→しっかり→なめらか→急
1曲1曲目立つよう
にぎやか、消えるようにおわる、ちがいがわかるようにしたい、ゆったりした曲もはやい曲もあるから、きいている人にも伝わりやすい、
終曲
みんなのをまぜる、花火祭り
前ぶり　前
説明、序曲、前奏曲

6. 4 音楽の要素と曲想との関係，及び表したいイメージとの関係を視覚化・意識化して共有

音楽の要素を小型ホワイトボードや板書を用いて視覚化することで，気付けていない要素やその変化に注意を向けさせて，意識化と自覚を促している。また，その音楽の要素と曲想との関係や，音楽の要素と表したい音楽のイメージとの関係性を板書による視覚化を用いてクラスで共有することにより，学習指導要領が求めている「曲想と音楽の構造などとの関わり」について学びを深めている。以下に「活動⑥第14～16時の各グループの発表を聴き合いながら組曲の構成を考える活動」で行われた意見交換の板書から，子供の発言の概要を紹介する。この板書により子供は自らの気付きや学びを拡げるだけでなく，思考の足跡や学びの履歴を把握し，理解することが可能になっていた。

たくさんの花火　バババババン
重なるよう連発　大きな音
ゆっくりジリジリ → ヒュー　ゆっくり上がる
小さな音

花火のイメージ
↓↑　　↓↑
音楽の要素 ⇔ 音・音楽

パート　重なり → シーン、一気、強く
変化　目立つ
速度　ゆっくり → まだかな、わくわく、ゆっくり
速く → はげしい、楽しい、いきおい
音色　ならし方 → やわらかい、弱
強弱　きつい、強
高低　低　思い、　高　明るい
強弱　リズムの中でもつけられる → 種類がふえる

7. 筆者による分析と考察

7. 1　音楽の要素と曲想との関係性の感受

子供の発言や記述に下記の言葉が見られたことから，学習指導要領が求める「曲想と音楽の構造などとの関わり」について理解を深めることができたと考えられる。さらに，理由を付して「〇〇の場面で生かせそう」という言葉もあることから，偶然性にのみ依拠した選択ではなく，自分達が表したい思いや意図により近い選択を試行錯誤することで，音楽の要素と曲想の関係性を活用できるようになったと考えられる。

・長調と短調の感じ方の違いに関する記述
・強弱の感じ方の違いに関する記述
・音色の感じ方の違い関する記述
・速度に関する記述や，「間をあける」などの記述
・音の高さ（音域）の感じ方の違いに関する記述

7. 2　2つ以上の音楽の要素の組合わせがもたらすはたらきやその効果を感受

明るい雰囲気を出すために「調を変える」「速さを変える」「楽器を変える（明：すず，暗：アゴゴベル）」「和音を変える」など，「調，速度，音色，和音の響き」の4つの音楽の要素を変化させて工夫していた。また，曲の雰囲気を変えるため「音色，音の高さ」の2つの音楽の要素に注目し，旋律の音域を高くして明るい雰囲気を醸し出そうとしたり，伴奏の響きを明るく感じられるものに工夫したりしていた。このように2つ以上の要素を変化させながら，自分達が表したい思いや意図により近づくよう，曲想や雰囲気の変化を感じ取りながら試行錯誤を重ねることができていた。

7. 3　ICレコーダーを活用したモニタリングとリフレクション

演奏しながら自らが発している音や音楽の変化を聴き取ったり，雰囲気の違いを感じ取ったりすることはプロ演奏家でも難しく，録音機器を自らの演奏に対するモニタリングやレッスンのリフレクションのために活用している者は多い。今回の活動でもICレコーダーを子供が自由に使うことによって，自らの演奏や音楽に関する気付きや新たな意識化などがみられた。

・「〇〇の部分で～」「〇〇と□□で」などのように，具体的に演奏場所を示しながら意見交換が行われた。
・以前の演奏と今の演奏を聴き比べながら，自分達が表したい思いや意図により近い表現を工夫していた。
・たたき方などの演奏法を工夫して，表したい表現に近い音色を出せるように工夫していた。
・「（聴いてみたら）意外に違いがわからない」などの言葉がみられ，自分たちが表したい表現により近づくように工夫していた。
・「間（ま）をとって雰囲気を変える」「旅が続くように速度を遅く」など，ICレコーダーの録音を聴いて振り返ったからこそ気付くことのできる発言もあった。

7. 4　小型ホワイトボードと板書の視覚化による「思考の足跡」の把握と「学びの履歴」の共有

小型ホワイトボートの活用や教師の板書により，自らの気付きや学びを拡げるだけでなく，「思考の足跡」の把握や「学びの履歴」の理解と共有の助けになっていた。実践者の渡会教諭からは，この共有・共通理解化によりクラスの8割の子供から「新たな表現を知った」という趣旨の記述があったと報告されている。

7. 5　グループとクラスの2段階の活動を経ることによる子供の内的変容の誘発

グループで「花火」の音楽づくりをしてからクラスで「組曲『花火』」を構成するという2段階の活動によって，子供は自身の思いや意図を表現する方策を創意工夫するだけでなく，他者がもつ思いや意図の表現を手助けする経験をした。これにより子供は自らの価値観以外についても音や音楽に関する気付きを得ることができ，音楽の要素と曲想や雰囲気との関係性に関する学びを深めることが可能になった。さらに「他者の役に立ちたい」「叶えてあげたい」という支援の思いから，自身の中で音や音楽に関する内的変容が誘発されて思考を伴った試行錯誤がより活発になり，創意工夫が活性化するきっかけにもなっていた。

おわりに

筆者が過去に行った調査では，平成20年頃の音楽科授業では半数以上が歌唱と合唱で占められており，

日本音楽と鑑賞を扱ったものがそれぞれ2割弱，そして僅かに音楽づくり（小学校）や創作（中学校）が扱われていた。その後,「表現と鑑賞を一体化させた授業」が実践されるようになり，平成29年に現行の学習指導要領が告示されて以来，特に小学校において音楽づくりの実践を目にする機会が増えている。残念ながらその多くは「表面的な音楽遊び」に終始しており，音や音楽に関する子供の内的変容を導き出すものには至っていない。しかし音楽づくりの活動を表現や鑑賞の活動と結びつけることで，子供は音楽に関する多様な内的変容を引き起こされ他分野の音楽活動にもよりよい成果が波及することを少しずつ知られるようになっている。よって今後も「表したい思いや意図に向かって，思考を伴った試行錯誤による音楽づくりの活動」を模索したい。

最後になったが，今回，貴重な研究実践を提供していただいた安城市立錦町小学校と同校の渡会深麻教諭へ，心より謝意を表しておきたい。

［注］

1）　実践者自身による授業案の立案及び具現化，一次分析については，次の報告書による。
渡会深麻「創造性を発揮し，仲間と共に豊かな音楽表現を求める子どもを目指して～音楽科「『6年竹組―花火―』をつくろう」の実践を通して～，令和元年度安城市教員派遣研究生報告書（委嘱委員：新山王政和)」，2020

2）　これまでに取り組んだ研究は次のとおり。

＊新山王政和・河田愛子「小学校音楽科における『思考を伴った試行錯誤』による『音楽づくり』の活動－ICT機器を活用して「共創」を模索した試行実践（その1）－」，愛知教育大学研究報告第68輯，2019

＊新山王政和・小瀬木崇「小学校音楽科における『思考を伴った試行錯誤』による『音楽づくり』の活動－ICT機器を活用して「共創」を模索した試行実践（その2）－」，愛知教育大学教職キャリアセンター紀要第4号，2019

＊新山王政和・安藤朗広「小学校音楽科における『思考を伴った試行錯誤』による「音楽づくり」(3)－表したい思いや意図に向かって創り上げていく活動－」，愛知教育大学研究報告第69輯，2020

＊新山王政和・安藤朗広「小学校音楽科における『思考を伴った試行錯誤』による『音楽づくり』(4)－文部科学省学習指導要領に示された音楽の構造と曲想や雰囲気に関する発言例に注目して－」，愛知教育大学教職キャリアセンター紀要第5号，2020

［参考文献］

＊文部科学省MEXT64『初等教育資料No.997』，東洋館出版社，2020

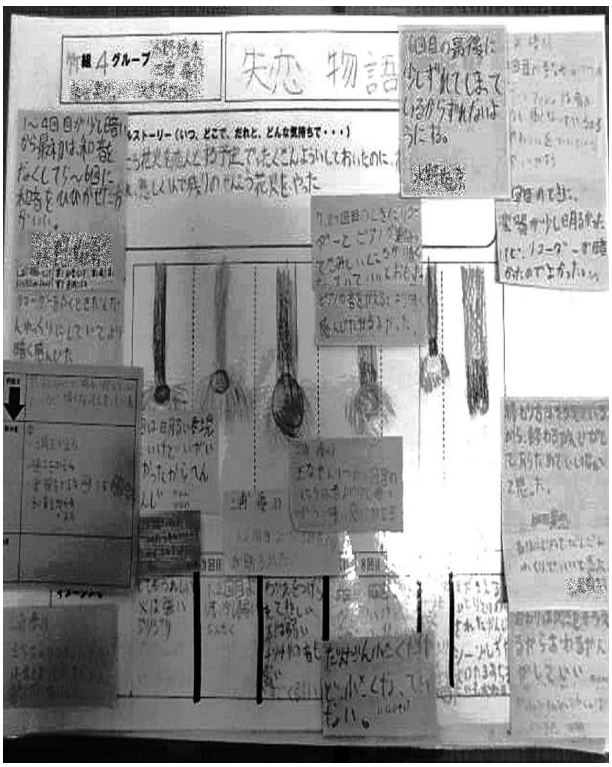
＊新山王政和「生きた知識と生きた技能を生き生きと身に付けられる音楽科への期待－既知の知識と向き合い自分なりの捉えで創生していく構造化，再構築･更新される知識とそれを支える技能－」,『学校教育No.1194』，広島大学附属小学校学校教育研究会，2017

＊新山王政和・蕃洋一郎「次期学習指導要領の『構造化され再構築・更新される知識』に注目した小学校音楽科の実践的一考察―小学校4年生を対象とした「創作わらべうた」の実践をもとにして―」，愛知教育大学教職キャリアセンター紀要第2号，2017

＊M.テイト，P.ハック著，千成俊夫・竹内俊一・山田潤次訳『音楽教育の原理と方法』，音楽之友社，1991

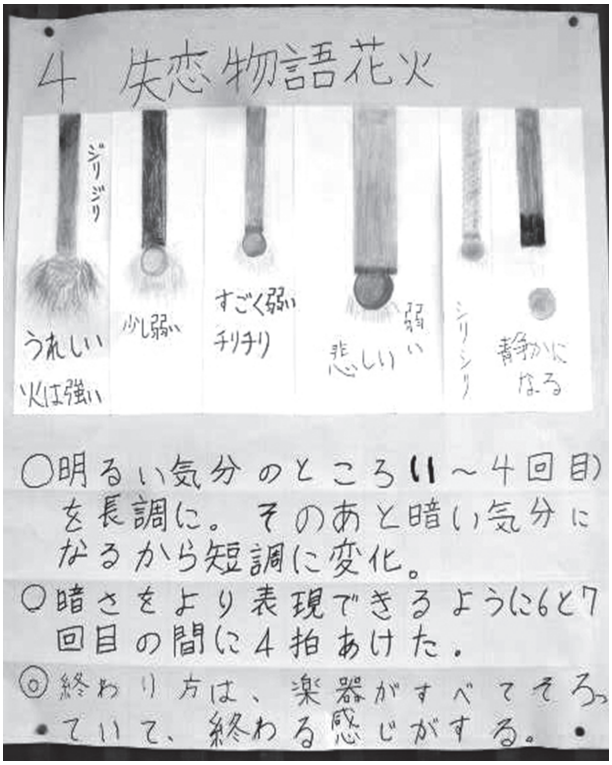
＊B.J.ジマーマン，D.H.シャンク編著，塚野州一編訳，『自己調整学習の理論』，北大路書房，2006

＊B.J.ジマーマン，S.ボナー，R.コック著，塚野州一・牧野美知子訳『自己調整学習の指導―学習スキルと自己効力感を高める―』，北大路書房，2008

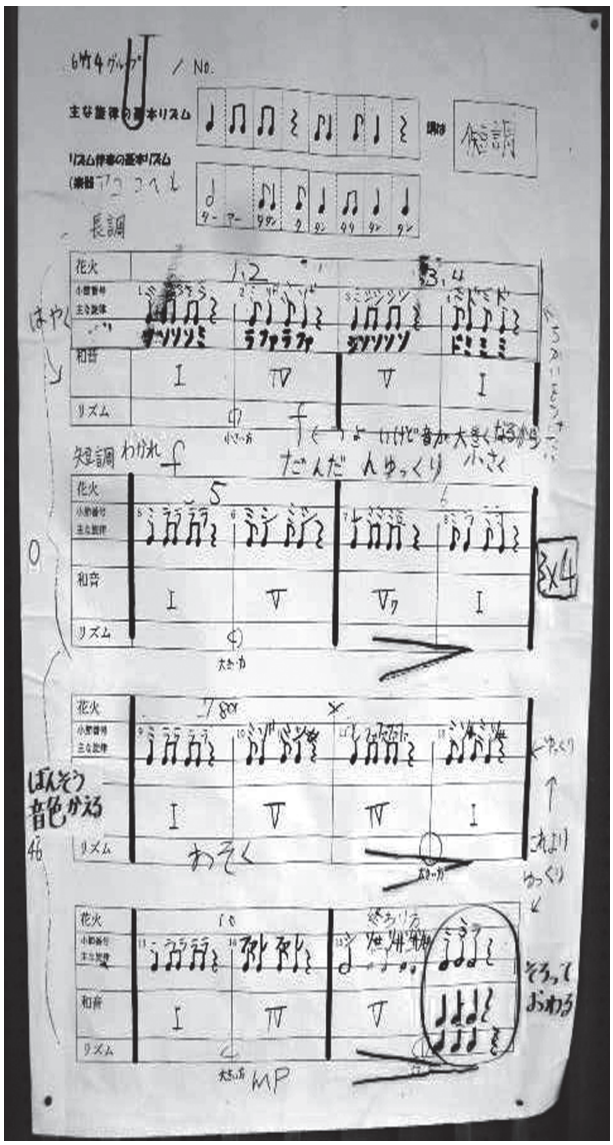


［写真１：グループで共有した構成表］

第４グループ「失恋物語花火」のイメージ構成表
＊表現できている部分，満足できない部分，音楽の要素に関する気付きを，色別の付箋紙に書いて貼る。多くの付箋が貼られていることに注目したい。

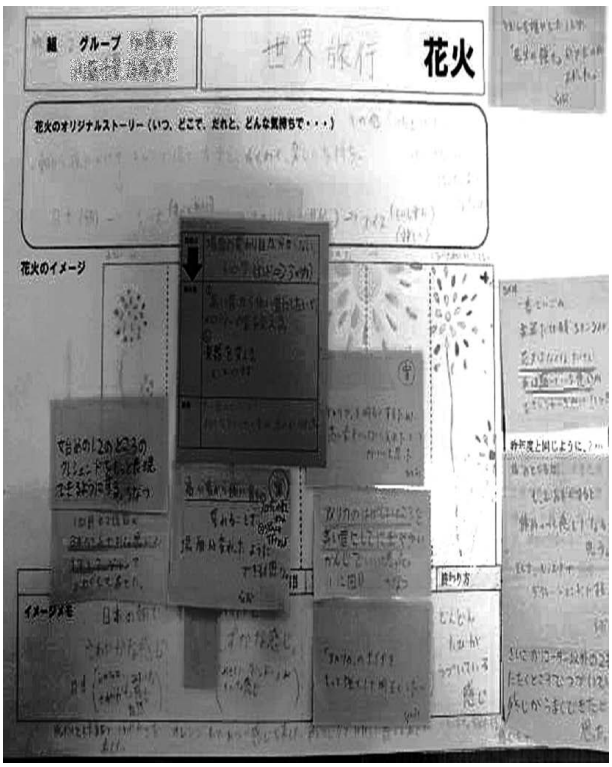


［写真２：グループで工夫したポイント］



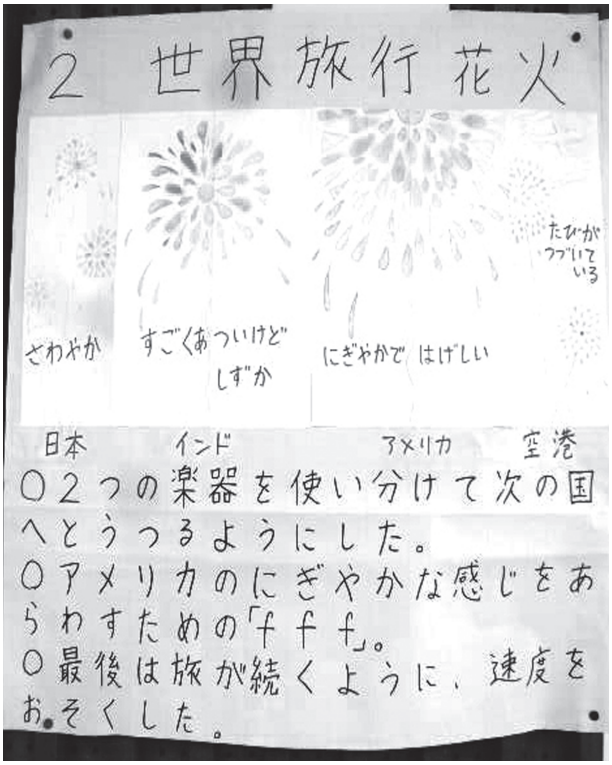
［写真３：グループで共有した音の構成表］

第４グループ「失恋物語花火」の楽譜
＊音楽の要素のうち「音色，速度，強弱，音の重なり，和音の響き，調，反復，縦と横との関係，間（ま）」に関する記述がある。

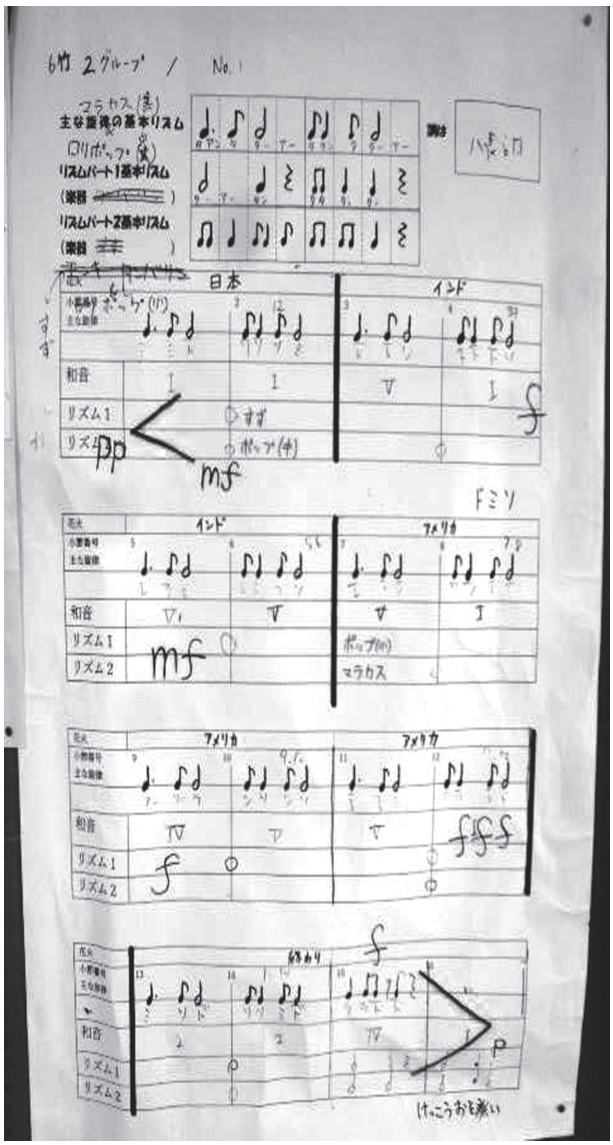


［写真４：グループで共有した構成表］

第2グループ「世界旅行花火」のイメージ構成表
＊表現できている部分，満足できない部分，音楽の要素に関する気付きを，色別の付箋紙に書いて貼る。多くの付箋が貼られていることに注目したい。



［写真５：グループで工夫したポイント］



［写真６：グループで共有した音の構成表］

第2グループ「世界旅行花火」の楽譜
＊「旅が続くように，けっこう遅い」などの，指導要領が求める「曲想と音楽の構造などとの関わり」に結びつくような発言もあった。

（2020年 9 月15日受理）